

# ダードウ

アーティスト

# ダーヨとねこ

## 登場人物紹介

- 第1章 人間と猫 みらいと今
- 第2章 成果を出す4ステップ
- 第3章 結果が出ない！
- 第4章 頑張りのご褒美
- 第5章 自責と他責の境界線
- 第6章 脱力のしかた
- 第7章 力の入れどころ
- 第8章 良さの伝え方
- 第9章 育児と育猫
- 第10章 失敗とはなにか

## 登場人物紹介

ダードー・・・・・ 国王の元お墨付き大臣。今は占い師として活動している

チヨンサ・・・・・ ダードーに憧れ、師事する優しい中年男性

ムネマ・・・・・ 少し荒っぽいが、実は心根は優しい三毛猫

# 第1章 人間と猫 みらいと今

## 人間と猫

ある街に、ダーヨという占い師がいた。昔は王国お墨付きすみつきの大臣で、その有能ぶりを買われ、王からも絶大な信頼を置かれていた。しかしなぜかダーヨはしばらくするとその身分を捨て、王宮おうきゅうを離れた。そして街の一角で、占いを始めたのだ。

占いと言いつつ、その人のビジネスや人生のアドバイスをし、それが的確てきかくで役に立つということで売れつ子占い師となっていた。

そして、ダーヨに相談をしに来て、そのままダーヨの考えに陶酔とうすいし、弟子として雇つてもらつことになったのが、チヨンサという男である。小太りな彼は無害な男で、とりあえず周囲に対し優しかった。しかし自分を主張するのが苦手で、なかなか自分のビジネスを成功できずにいた。そんなチヨンサだが、誰にも持つていない特殊能力を持つていた。

ダーヨの元で働くようになつて数週間が経つたある日のことである。チヨンサはボーとしながら道を歩いていた。

その道の横にある家の屋根に、三毛猫が気持ちよさそうに寝ていた。その猫はムネマというオス猫であった。ムネマは気持ちよさそうにゴロゴロと、暖かい日差しの中、屋根で寝ていたのだが、うつかりとその屋根から転げ落ちてしまったのだ。

屋根から落ちたムネマと、とぼとぼと歩いていたチヨンサがちょうどぶつかってしまった。「ゴチン」とこれまた痛そうな音が鳴り響いた。

「いてててて・・・

チヨンサは思わず尻餅しりもちをついて、頭を撫なででた。

すると、こんな怒号どごうが聞こえてきた。

「つたく何してんだよ、痛えじゃねえか！」

すみません・・・と謝るうとしたが、そこにはチヨンサと同じく頭を手で抱えた三毛猫がいるだけで、人の姿は見えなかつた。

「あれ、どこかで誰かに怒られた気がしたんだけど」

チヨンサが不思議がりながら辺りを見回すと、猫がこっちを見ながら、なんと喋つたのである。

「だから痛えって言つてるだろうが。どうしてくれんだよ。ってあれ、なんでおれ、人間と喋つてるんだ？」

世の中不思議なことがあるもので、ぶつかった拍子に、なんの因果いんがか、人間と猫、お互いの言葉がわかるようになつてしまつたらしい。

猫と話ができる、これがチヨンサの特殊能力となつた。

## 将来が不安なお客さん

この日も占い師ダーヨの元には相談をしに、お客様が来ていた。

チヨンサがやることは、お客様にお茶を出したり、事務所の掃除をしたり、ダーヨからお使いを頼まれたりという雑務を主にこなしていた。

お客様が帰つて、一息つき、チヨンサはダーヨにお茶を出してあげた。

「お疲れ様でした、ダーヨさん」

お茶を受け取ると、ムスッとした顔をしながらも、

「ありがとうございます」

と言つて、お茶を少し口に含んだ。

「今日はどんなご相談内容だつたんですか」

興味を持ったチヨンサはダーヨに聞いてみた。

「今日ですか、今日はどちらかというと心の問題で、自分の将来が不安だというものでしたね。よくある話です」

また一口お茶を含んだ。チヨンサも自分の未来が不安であった。今はダーヨの元で働いているが、この後どういう人生プランでやつていこうか。

「先ほどの方が言うには、今の仕事に別に不満はないが、どうもパッション溢れる<sup>あふれる</sup>ような形で熱中できていらないようです。それもあって、スキルの向上もあまり見込めていないようです。それをずっと続けて自分は幸せになれるかどうか、不安なようです」

「ダーヨさんはどんなアドバイスをされたのですか」

チヨンサはそいつた漠然とした不安の相談に、ダーヨがなんと答えるか興味<sup>きょうみ</sup>があつた。

「私からは、まず今仕事があることに感謝した方がいいんじゃないかと言いました。あの方が言うには、ご自分の興味がある分野があるそうなので、それを隙間時間を使って極めて、それを自立できるようになればいいのでは、とお話ししました」

確かにそれはそうなのだが、本当にそんなことができるのか、懷疑的であった。日中は仕事をしつかりやって、今の基盤は継続させる。そして空いた時間を使って自分の好きなことをしてスキルを磨く。そして磨き切つたら、自分の好きなことにシフトさせる。確かに非の打ち所がない戦法だが、チヨンサの心は晴れなかつた。完璧すぎて何か釈然としないのだ。

## 「先まで考えすぎなの？」

お昼の休憩時間となり、チヨンサは事務所を出てプラプラと街を歩いた。そして三毛猫のムネマと会つた。

「おう、チヨンサじゃねえか」

この言葉を発したのは人間ではない、猫のムネマである。先ほど言ったようにぶつかつてから、お互いに猫語と人間語がわかるようになつてしまつたのである。

「やあ、ムネマさん、お疲れ様です」

チヨンサはお人よしだが、まさか猫にまで敬語を使うとは。もう敬語を使うのがデフォルトになつてしまつているのである。

「どうした、浮かない顔をして」

いや、、、といながら、チヨンサは先ほどダーヨが面談したお客さんの話をした。

「ふうん、将来の話ねえ。なんか人間って、本当にいちいち悩むよな」

「ムネマさんはあまり悩まないのですか」

猫のムネマは地面に「ゴロゴロと横になりながら、面倒くさそうにチヨンサに言った。

「そもそもおれたち猫はお前ら人間ほどは生きられない。人間は長生きしそうなんだよ。だからあまり何十年も先のことを考えたりはしない。今日、どれだけダラダラと生きられるか、美味しい飯が食えるか、それだけなのさ」

そう言つと、ムネマはあくびをして、さらに伸びをした。そして気持ちよさそうに目をつむつた。その様子を見ながらチヨンサはムネマを羨ましく思った。ムネマは野良猫だが、街に行けば残飯があつたり、誰から餌を惠んでもらつたりと、食うに困つている様子ではなかつた。

そしてお腹が満たされると暖かい場所を見つけてそこで「ゴロリと横になる。そして気持ちよさそうに寝てゐるのである。

それに引き換え人間は、あくせくと働き、顔に苦渋の色を浮かべ、毎日働いている。

人間が生物のピラミッドの頂点にいるのではなかつたのか、どこかで逆転してしまつてはいなかつた。チヨンサは懐疑的になつた。

「まあ、あんまり悩みすぎるなよ、人間さん。今を楽しもうぜ」

そう言つてムネマは眠つてしまつた。

## 今を噛み締める

家に帰つて、チヨンサは日記を書き始めた。これはチヨンサの習性で、毎日日記を書くのであつた。

「〇月〇日 晴れ

今日、ダーヨさんの元にあるお客様さんが相談をしにいらした。今の仕事に不満はないが、情熱がなかなかそそげないとのこと。このままこの仕事を続けることに将来の不安を覚えているとのことであった。

猫のムネマさんは、人間は長寿すぎて、将来のことを考えすぎだと言つていた。確かに人間、考えすぎなところはある。

一方ダーヨさんが言つように、隙間時間を使うて自分で好きなことでスキルを磨いて、ゆくゆくはそちらにシフトしていく方法もあるだろう。

でもなんだかぼくは釈然としない。この釈然としないのはなぜだろう

ここまで書くと、チヨンサは家の窓を開け、涼しい風が入つてくるのを感じた。

ふとチヨンサは気づいた。今、幸せだと自分が感じたことに。

今日も日記が書けて、今涼しい環境に身を置けている。これって幸せなんじやないか？

求めすぎるとつらくなる。今を大事に、というより、今を感じるという感覚がとても大事な気がした。

その時、窓の外からニヤーという声が聞こえた。まさかムネマかと思ったが、それ以上は詮索しないようにした。

そして窓を閉め、床に入った。

今を感じる、今を噛み締める。それがとても重要な気がした。

## 第2章 成果を出す4ステップ

### 最近多い、将来の悩みを抱えるお客様さん

今日、ダー<sup>ヨ</sup>の元に占いと言つ名の相談をしに来たのは若い女性であつた。

相談部屋から漏れてくる声で、チヨンサはあらかたその相談内容がわかつてしまつた。その人は、前回来た人同様、将来が不安のこと。

現状に不満はないが、この人もやはり、自分の好きなことで大成<sup>たいせい</sup>したいと思つているが、なかなかその芽が出ず、悩んでいるとのことだつた。

ダー<sup>ヨ</sup>は言つた。

「そうしましたら、具体的に、成果が出るようになる4つのステップを教えましょう。それは・・・」<sup>10</sup>  
ここは重要な箇所だ。そう思つたチヨンサは相談部屋とチヨンサがいる部屋のドアに耳をつけ、その内容をなんとか聞こうとした。

しかしドアにつけた反対の耳から、「にゃくーん」という聞いたことのある鳴き声がした。

振り返ると、そこには三毛猫のムネマが、空いた窓から入つてきているではないか。

「なんですか、ムネマさん、勝手に入つてきて・・・。今からいいところなんです」

小声でチヨンサはムネマに話しかける。ムネマはそんなことはお構いなしの様子で、あぐびをして言つた。

「なんだよ、そんな変態みたいにドアに耳をつけて。なんだ、盗み聞きか?」

「べつ、別に盗み聞きじゃないですよ。ただ、ちょっといいアドバイスをしそうだから、ちょっと聞こうかなあなんて」

少し焦るチヨンサを尻目に、ムネマがぼそっと言った。

「それを盗み聞きと言うんだよ」

## 盗み聞きする4ステップ

幸いにも、チヨンサとムネマが話をしている間に、その、成果を出すための4つのステップの話はまだされていなかった。

ダーヨが言った。

「自分の好きなことで成果を出すための4つのステップ。まず一つ目は、成功したイメージをありありと頭に思い浮かべることです」

「成功したイメージですか・・・」

あんまりしつくり来ていないようで、相談者の女性は言った。

チヨンサとムネマは顔を見合せた。

「なんだなんだ、なんの話をダーヨのおっちゃんはしてるんだ?」

混乱した三毛猫のムネマはチヨンサに言った。

「人間が自分の夢を叶えるための方法について、教えているんです。

一つ目は、成功したイメージをありありと思い浮かべることだそうです」

「なんだ、別にそんな難しいことじゃなさそうだな。たとえばおれだったら、あの魚屋からサンマをかつぱらいたかつたら、そのかつぱらうイメージをすればいいってことだろ、簡単じゃねえか」「簡単じゃねえか」に答えるが如く、ダーヨは相談者に補足した。

「イメージするだけ? そう思ったかもしません。しかしちゃんとイメージするのは難しいものです。心のどこかで“どうせ出来っこない”と思つてしまつのが、悲しいかな、人間というものです」少し寂しげにダーヨは話した。

ドア越しにその話をこつそりと聞いているチヨンサは、「確かに、ダーヨさんの言う通り、イメージはできてもそれを本当にできると信じ切るのは案外難しいかも知れないです。

「どうせダメだらうとか、この前もダメだつたしどうじう」と言い訳にして、ちゃんとイメージしていないかもしません」と言った。それを聞いたムネマも、

「確かに魚を魚屋からかつぱらうときも、前に失敗した店でもう一度かつぱらおうという気にはならねえな。やつぱりそれは失敗したイメージが、頭の中にこびりついているからかもしだねえな」と、ひとりごちた。

ダーヨの話は続く。

「ちゃんと自分を信じ、成功イメージを確信できるところまで頭で想像できたら、第一ステップに統きます。それは、勇気を持つてそれを実行することです」こつそり聞いている二人組、チヨンサとムネマもひそひそと話した。

「確かにダーヨのおっちゃんの言うように、イメージしただけだと意味ねえな。魚屋から魚をかっぱらうイメージがちゃんとできたら、それを実行に移さねえとな。なにもしなければ、腹は膨らまねえ」

そう言うムネマを見ながら、「そんなに生きるために盗みを働くなら、もう少し彼にエサを与えるか」とチヨンサは思った。

続いて三つ目、とダーヨは続けた。

「三つ目は行動した後、ちゃんとそれを振り返ることです。この振り返りをしない人が多すぎます。イメージした、勇気を持つて行動した、ならばその結果を振り返るべきです。ちゃんとイメージできた通りにできたのか、それともできなかつたのか。できなかつたのならなぜそれができなかつたのかを考察する。自分の中で腹落ちさせることが重要なです」

チヨンサはそれを聞きながら、自分の中でも思い当たる節があつた。

確かに衝動に駆られ、今までも行動したことはあった。しかしあまり振り返りをした覚えはない。この振り返りをしないと、また衝動に駆られてしまい行動する。そしてその繰り返しになつてしまつのだ。一度ピリオドを打つ意味でも、イメージし実行した後の振り返りは重要なだと思った。

そして最後は、とダーヨは相談者の女性に話をした。

「最後は、それができた自分を褒めることです。悲しいかな、なかなか大人になると誰も褒めてくれなくなります。子どもの時は親や先生、年上の人たちが褒めてくれたでしょうが、大人になると途端に褒めてくれなくなります。

ですから、ちゃんとイメージ、計画し、勇気を持つて実行。そしてそのままにせずちゃんと振り返りをした自分を褒めてあげることが重要です。そうしないと、『自分がそっぽを向いて、うまく動い

てくれなくなります。

今まで話した4つのステップを、自分の好きなことに対し行うのです。そうすれば成果は必ず付いてきます

猫のムネマは今までの4つのステップを暗唱<sup>あんじょう</sup>した。

「4つのステップ。イメージ、行動、振り返り、そして自分を褒める。なんだ、人間ってのはこんなことを考えながら生きていやがんのか。まったく面倒くさいことをするなあ」  
チヨンサと一緒にドアに聞き耳を立てていたムネマであつたが、少し拍子抜け<sup>ひょうしうけ</sup>と言つた感じで、ドアを離れ、窓際にさつと飛び乗り、目をつむつてしまつた。

時刻は三時。ムネマはお昼寝タイムに入つてしまつたようだ。

しばらくして相談者とダーコは相談部屋<sup>しううかく</sup>から出てきた。

相談者の女性は、来た時よりもなにか収穫<sup>しううかく</sup>があつたような顔で、事務所を出て行つたのであつた。

## その日のチヨンサの日記

「〇月〇日 晴れ

あまりよくないことだとは思いつつ、ダーコさんの元に占いに来た人の話を少し聞いてしまつた。この人も自分の将来に自信が持てないらしい。最近こういった相談をしに来る人が多い気がする。みんなどうしてしまつたのだ・・・。

ダーヨさんは相談者さんに、成果を出すための4つのステップを教えていた。まず成功のイメージをしっかりと頭で思い描くこと、そしてそれを勇気を持つて実行する。そしてちゃんと振り返りをする。最後にそこまでのステップをちゃんと実行した自分を褒めるというもの。

この流れを自分の好きなことに対し、愚直に行なつていけば成果は必ず出るというもの。  
ぼくもこの四つのステップを意識して、明日から取り組んでみよう。

P.S. ムネマさんはいつも自由に事務所に来て、ひとしきり話してお気に入りの日当たりのいい窓辺で寝てしまう。なんて<sup>のんき</sup>香氣な猫だろう。いや猫なんてみんなそうだろう。ぼくら人間くらいだ。こんなにいちいち意識して生きているのは。

4つのステップで頑張つてはみるけれども、ムネマさんを見習つて適度にサボりつつやるう、<sup>かんきゅう</sup>緩急はだいじ、だいじ」

## 第3章 結果が出ない！

### なぜ成果が出ない

今回から、ダー・ヨと相談者との面談に、チヨンサも同席して良いことになった。

もしかすると、前回三毛猫のムネマと一緒に立ち聞きしていたのがバレたのかもしれない。しかしダー・ヨはなにも言わず、「同席していいですよ。一緒に聞いた方が、あなたの勉強になるかもしれない」と同席を許してくれたのだ。

そして、今回の相談者は、色々と努力はしているけれども、なかなか成果が出ず困っているという話であった。

実はその人は二回目の相談で、前回の、成果を出す4ステップをダー・ヨから教えてもらつており、実践しているのだが、成果が出ないということで、若干クレームっぽい感じで、今回訪問してきたのであつた。

その人はかなり若い方で、勢いのある男性であつた。席に着くなりダー・ヨに食つてかかつた。

「どういうことですか、ダー・ヨさん。あなたのアドバイス通り成果を出す4ステップを何年も試みましたが、まるで効果が出ません。ぼくが費やした時間を返してください！」

どうしたものかと、横にいるチヨンサははらはらしながらダー・ヨを見ると、ダー・ヨは落ち着き払った様子で、言葉を返した。

「あなたはどれくらい努力したのでしょうか」

「この4ステップをどれだけ実践したかということですか？もう五年やりましたよ。五年ですよ、五年。それだけやって成果が出ないなんて、きっとこの方法が間違っているんだ」

ダーヨは口元に手をやりながら、その若者に答えた。

「私が教えた4ステップを一度復唱してもらいますか？」

若者はイライラしながら答えた。

「まずは成功のイメージをしつかりと頭の中で思い浮かべる。イメージができるたらそれを勇気を持って行動する。そして振り返る。最後にそれができた自分を褒める。合っているでしょう？」

確かにその若者が言っていることは、ダーヨが教えた内容と一致していた。

つい最近この4ステップの話を聞いてから、チヨンサもこれを実践していた。しかし五年もやって効果なしとなれば、この4ステップを続けるかどうかチヨンサとしても疑いの眼差しを、ダーヨに向かざるを得なかつた。

「ちなみに、その、あなたの努力していることは、一体なんでしたっけ」

ダーヨは落ち着きを保ちつつ、若者に尋ねた。

「ぼくが頑張っていること。それはある工芸品を作ることです。そしてそれを売つて、生活を成り立たせることです。しかし良い工芸品をいくら作つても、誰も買つてくれない。きっとこの良さがわからぬ馬鹿者ばかりなんだ」

若者は怒りをぶちまけていた。しかしチヨンサはこの若者を嫌いにはなれなかつた。

努力しても報われない。誰からも褒められない。そんな生活が五年も続いたら、自分だつたらとても耐えられないだろう。

## 猫視点の意見

と、その時、面談部屋の空いている窓から、三毛猫のムネマがそろりと部屋に入ってきた。

「あらあら、この猫ちゃんですね。この近所の野良猫ですね」

ダーヨは笑みを浮かべて猫の侵入を許した。そしてムネマはチヨンサのそばに座った。

「よう、チヨンサ。なんだよ、この部屋の空気は。なんかこの若い兄ちゃん。えらい威勢<sup>いせい</sup>がいいな」ムネマはチヨンサに話しかけたが、猫語が理解できるのはチヨンサだけである。周りの人間からは猫がにやんにやんと言っている風にしか聞こえない。

チヨンサもムネマに話しかけたいのだが、猫に話していたらダーヨと相談者さんがぎょっとするだろう。チヨンサは目でムネマに訴えかけた。今は喋れないですよ、と。

それを分かつたのかどうかは分からぬが、チヨンサから返答がなくとも特に気にせず、チヨンサの横であぐびをしたのであつた。

「ぼくの努力はきっと報われないんだ。ぼくはこの工芸品を作るという好きなことで、一生食つていけず、嫌な他のことをして生きていかなければいけないんだ」相談者の若者は今にも泣き出しそうであった。

そんな若者を見て、ムネマはぼそつと言つた。

「なんだよ、馬鹿馬鹿しい。重く捉えすぎなんだよ。あと努力したって言つているけど、本当にこの兄ちゃんは努力したって言えるのかね」

「どうということですか?」という不思議な顔をチヨンサはした。ムネマは話を続けた。

「おれは昔負った傷が原因で、左の後ろ足がうまく動かねえ。普段の生活は送れるが、いざ獲物を狙おうとした時は、昔に比べて速い動きができなくなつちまつた。

それでもおれは野良猫だから、獲物を取つて生きていかなきやならねえ。でも体はうまく動かねえ。

そんなとき、おれは考えた。どうすれば体は遅くても獲物を捉えられるかってな。死に物狂いのその果てに、おれはある方法を編み出して、獲物を取れるようになつた。その死に物狂いさがこの兄ちゃんからは感じられねえな」

ムネマは少し冷たい眼差しで、相談者を見てそう言つた。  
生き死にがかかると、生き物の集中度合いは飛躍的に向上する。この相談者さんは夢に向かつて動いているが、今生きている様子を見ると、他に仕事もあって収入もあるのだろう。

それに比べてムネマは野良猫。収入なんていう概念はない。自分で餌を調達しなければならないのだ。人間と野良猫、二つの生き物には生死に関するギャップが大きくあるらしいと、チヨンサは思つた。

## 努力の方向

しばらく黙っていたダー・ヨは再び口を開いた。

「厳しいことを言うようですが、おそらく努力が足りないのだと思います」  
なんとダー・ヨもムネマと同じことを言つた。しかもかなりストレートに。当然相談者は反撃をしてきた。

「なんですつて。ぼくの努力が足りない?なんて言つことを言つんですか。ぼくは努力していますよ、例えば・・・」

そう言つて毎日のルーティーンを相談者の若者は話し、いかに自分が時間を有効活用しながら自分の夢の方に時間を注いでいるかを熱弁した。

それに対し、ダーヨは冷静に言つた。

「すみません、言い方を間違えましたね。努力が足りないのではなく、努力の仕方が誤つて あやまついるんだ

と思います。

努力というのは継続することです。あなたは確かに継続することはよくできていて、すばらしいと

こうイメージしてみてください。あなたは車に乗つていて、車にガソリンを入れることと、ハンドルを握り、アクセルとブレーキをうまく使い分けながら、ゴールを目指すことです。

あなたは長い時間、ガソリンを絶やすことなく補給している。もちろんガソリンはタダでは手に入りません。ガソリンを得るために他の仕事をし、ガソリンを買って補給をしている。あなたはそれを五年も続けている。その継続力、努力は賞賛に値します。

そしてあなたはハンドルを握り、自分が作った工芸品をみんなに買ってもらつて生活を維持するという夢、目標に向かつて車を走らせていて、しかし五年も同じことをするがそこに到達していない。いや、どれだけ進歩をしているかも分からぬ。そんな感じでしょ?」

尋ねるダーヨに、相談者は口をあんぐりと開けて、うなづいた。

「そうです、そうですとも。まさにそんな感じです。霧きりの中を歩いているようで、ゴールが見えず、もう泣きそうな状態なんです」

若者は切実にダーヨに訴えかけた。ダーヨは話を続けた。

うつた

「もしさなたがこの状態、つまり霧に包まれたようで、自分のゴールに向かつて走れているか不安なとき。その時は“ゴールを“分ける”必要があります」

「ゴールを分ける？」

そう、つい言つてしまつたのは、チヨンサの方であつた。ゴールを分けるとは一体どういうことなんだろう。

「なるほどな」

そう言つたのは猫のムネマである。えつ！と驚いてチヨンサはムネマを見ると、ニヤリと笑つて答えた。

「この兄ちゃんは欲張りすぎなさ。おれの例で言えば、足が悪くても獲物を取りたい。それがゴールだとするだろ？でもなかなか獲物が取れない。これが現状だ。

普通、獲物を取りたい、でも頑張つても取れない。どうしよう。となつて絶望して、本当に獲物が取れないと、弱肉強食じやねえけど、死んでいく。

まず獲物を取りてえんだつたら、獲物にどういう習性があるのか。そもそも自分が狙う獲物はなんのか。スズメなのかカエルなのか。まずターゲットを絞る必要があるんだよ。

スズメだつたら狭いところに誘い込んだほうがいいとか、カエルだつたら夜狙つたほうがいいとか、まあ、野良の知識として色々あるんだよな。

だからこの兄ちゃんも頑張るやる気があるんだから、まずはなんかを誰かに売りてえと思つたら、誰に売るかっていうことをもうちつと考えたほうがいい気がすんな。・・・まあ売るっていうことがよくわからぬえけど

ムネマの説明が終わるくらいに、ダーヨも話を始めた。

「ゴールを分けるとは、まず、もう少し細分化したほうがいいということです。

あなたの話を聞いていると、誰でもいいから買ってくれ、と聞こえます。

そうではなくて、どんな人に買って欲しいのか。相手の立場になつて考えてください。あなたは工芸品を買いますか？その人はなぜ買うのか。そこをもつと考えるべきだと思います。

自分のはいい商品だ。だからみんな買っていくはずだ、は、かなり短絡的たんらくと言わざるをえません」ピシヤリとダーットは言い切つた。

若者はぐうの音も出ない様子であつた。

その日の面談は終わり、相談者は帰つて行つた。

## その日のチヨンサの日記

○月○日 曇り

今日の相談者さんは、努力しても成果が出ないというお悩みを持つ方だった。自分が正しいと思っていることを続けるのは実際すごいと思う。でも客観的に見ると実はそれだと全然足りていらないということももちろんあると思う。

それを受け入れるのがすごい難しいだろうな。だつて自分がやつてきたことを何か否定するような気がするから。

それでも成功をするためにはそれを乗り越えないといけないのかな。成功するつてなんて大変なことなんだろう。

## 成功するための、隠し味

そこまで日記を書いたところで、窓からにやおんという声が聞こえた。なんとそこにいるのはムネマであった。

「よう、こんばんは。なんか寝れなくてよ。つい来ちまつた。お邪魔だつたかね」

「いえ、大丈夫ですよ、ムネマさん。お扈<sup>そば</sup>はお話できずにすみませんでした。さすがに猫と、人間の前で話すのはね」

そう言つて、はははとチヨンサは笑つた。そして少しため息をついた。

「今日の話、なにかぼくは<sup>しゃくせん</sup>釈然<sup>しゃくぜん</sup>としないんです。あの相談者さんの努力を否定してしまつた<sup>むく</sup>気がして。

あの人は全然悪くない。逆にとても頑張つている人だ。報<sup>むく</sup>われてほしいものです」

うーんと言つてからムネマは言つた。

「まああの兄ちゃんはあんまり氣負いせず、もつと氣楽にやつたほうがいいと思うけどな。自分は才能がない、ダメなやつだ。だから時間を使つても全然成果が出ないんだとかは思わないほうがいいな」

「でも実際自分を責めてしまう人は多い氣がしますけどね」

チヨンサは少し落胆<sup>らくたん</sup>した様子で、ムネマに話した。それだけ努力しているのに成果が出ないことで、モチベーションの低下はひどいものだと思つていた。

「でもよ、チヨンサ。お前は猫と喋れるようになるつて、思つてたかい？」

ムネマからの意外な質問<sup>せいてん</sup>に、少し面くらいながらも、チヨンサは答えた。

「まさか、まさに青天の霹靂<sup>へきれき</sup>。そんなことが起きるとは思つてもみませんでしたよ」

青天の霹靂はよく分からなかつたようだが、ムネマは答えた。

「そうだよな、おれもだ。人間と喋れるようになるなんて思つてもみなかつた。だから世の中何が起きるか分からねえ。だから何かしたいんだつたら、諦めないで続けるつてのもそれはそれで正しいと思うんだ」

確かにそうなのかもしれない。あの若い相談者さんが帰る時、ダーヨは優しく言つていた。

「あなたの努力は決して無駄にはなつていません。今は成果が出なくて辛いでしょう。でも決して諦めないことです。というより、あなたが本当にしたいことであれば、どれだけ辛くともあなたは決して諦めないでしよう。逆に諦めてしまう夢だつたら、それまでということです。

少なくとも私はあなたを応援しますよ。また悩んだらここに来てください」

そう言つたダーヨに対し、相談者さんは「ありがとうございます」と深々と頭を下げていた。

多分また悩みを抱えたらあの若者はここに来るだろう。ダーヨを求めて。そういうつた意味だと何か成功のヒントは、誰からか「ありがとうございます」と言わることのよつた気がして、ならなかつた。

## 第4章 頑張りのご褒美

### 疲れているチヨンサ

今日のダーヨへの相談については、チヨンサは出席しないことにした。

面談時間は一時間ということで、その間休憩をもらつて、近くの川で腰を下ろしていた。事務所から出る時に、猫のムネマもついてきた。一人と一匹はお互い何も言わず川まで歩き、腰を下ろした。

空は曇っている。空気も湿つていて、この後少し雨が降るかもしれない。

チヨンサは手頃な小石を握り、川に投げたが、一回も飛び跳ねなかつた。

「どうした、なんかお前、疲れてねえか？」

少し不安に思ったのか、猫のムネマはチヨンサをきづか

なんだかんだ二人は長い時間を共にするようになつてきて、なんとなく相手の調子が良くない時は、それに気づくくらい親密になつていた。

今日のチヨンサは元気がない。いつもだつたら積極的に面談に同席するのに、その時間を休憩に当てている。

それにムネマは気づいていた。チヨンサは精神的に疲れると自然に触れたくなる傾向があると。

この川は特にチヨンサのお気に入りで、疲れた時はしばしばここに通つていることを、ムネマは知っていた。

なんとなく沈んだオーラを纏つたチヨンサは、また手頃な石を探し、そこらをかがんでいた。

「正直、なんだか疲れちゃったんですね」

チヨンサは一つ目の石を探し当て、川に投げた。

「ぼくはぼくなりに頑張っています。たまに成果は出るけど、なんだか疲れてしまつて。休息の取り方がうまくないのかなと思うんです」

確かにムネマはそれを感じていた。

チヨンサは真面目すぎる。仕事にも家庭にも一直線だ。そして何かうまくいかないことがあると、自分に責任があるとして、自分を責める傾向がある。

「お前さんは真面目すぎるんだよ。Take it easy (テイク イット イージー)。もつと気楽にやんなよ。これだから真面目な人間は苦手だぜ」

そう言つて、ムネマは回れ右をして街に戻つて行つた。

チヨンサはしばらく石を探しては川に投げていたが、うまく石が跳ねず、しばらくやうしてから断念して事務所に戻つて行つた。ちょうど一時間が過ぎようとしていた。

## リラックスする時間

しかし事務所に戻つたはいいが、ダーヨの姿はなかつた。その代わりに相談者さんがまだいた。

「あれ、ダーヨさんはどうしたんでしょう」

今回の相談者はチヨンサと同じくらいの年代の四十年代の男性。小太りといつところも、チヨンサそつくりだ。

「ええ、私との面談が終わつた後、**足早**に出かけて行きましたよ。何やら用があるとのことで。私はしばらく言われたことを考えて、そろそろおいとましようとしていたところです」

相談者は荷物をまとめ事務所のドアに向かつた。

そこまで付き添つた際、チヨンサはその男性に聞いてみた。

「いかがでしたでしょうか。今日の相談・・・いや占いは？」

男性は少し笑みを浮かべた。

「ダー・ヨさんにはとても親身になつて相談・・・いえいえ占いでしたね。占いをしていただきました。とても身になる話でしたよ」

途端にチヨンサはこの男性がうらやましくなつた。この人は悩みを一つ解決し、前に進もうとしている。

それに比べ自分は何か成長ができているのか。成長ができたこの男性を、とても羨ましく思った。

「ちなみに今日はどんなご相談内容だったのでしょうか」

自分がその面談に参加していれば聞かなくてよかつた質問だが、ついチヨンサは気になつて聞いてしまつた。

「今日の悩みは、私が自分を責めてしまうことです。小さなことから大きなことまで、すぐ自分のせいで、自分を責めてしまうんです。それをどうにかしたくて、ダー・ヨさんの占いに来たというわけです」

「どのようなアドバイスを受けたんですか」

チヨンサは自分もぜひ知りたいという気持ちが強くなつてしまい、続いて聞いた。

「ダーヨさんからは別に自分を責めるのは悪くないと言つてくれました。それよりもっとリラックスする時間を取りた方がいいと言われました」

「リラックスの時間ですか」

「人はもう玄関まで来ていたが、しばらく立ったまま話を続けた。

「ええ。だいたい私の平日の予定が朝に家のこと、いわゆる子どもの世話や洗濯などの家事を妻と分担して行い、その後仕事に行っています。

そうして夕方になつて帰つてきてまた子どもの世話をして家事をして、すぐに就寝という形を取っています。それを平日は五日あるので五回連続で行うんですね。

そして休みが二日あるのですが、ほぼ育児と家事が終わつて、また平日が始まるところな感じなんです。人に話して分かつたんですが、自分の休憩時間がほぼないんですね」

実はチヨンサの生活もほぼこの男性と同じであった。妻と育児と家事を分担しながら仕事をして、休日も家族と過ごす。家族と過ごせるのは本当にありがたく幸せなのだが、この生活リズムだと一分も自分の自由時間がなく、『疲れた』という感情がどうしても拭いきれなかつたのだ。

「ですので、なるべく何もせずゆつくりリラックスする時間を意図的に<sup>いと</sup>設けることにしました。それこそスケジュール帳に書き込むくらいの勢いで、ちゃんと休息を『予定する』。ダーヨさんに言われて気づきましたが、私は休息を取ることを舐めていたんだと思います」

確かにチヨンサの中でも休息や休憩は、サボることと同義の意味な気がして、なんだか積極的にやつてはいけないものだと思っていた。

しかし実際、そんな張り詰めた生活を送つても、疲れるだけだ。もつと休息を積極的に取らないといけない。

二人は話し終わり、チヨンサが事務所のドアを開けると、相談者の男性は深々とお辞儀をし、街の中へと消えていった。

## 今日の日記‥意識的に手を抜く

○月○日 くもりのち雨

最近ぼくは元気がなかつたのだが、働きすぎだつたのかもしれない。仕事をして家のこともやって、自分の趣味も隙間時間に行う。そんな生活をずっと何年も続けてい る。

なんだか油を差していないブリキのおもちゃのようだ。パツパツに詰めるのではなく、油を差して休憩をさせることが重要な気がする。

そういえばダー・ヨさんは仕事の時間は本当に短いし、ムネマさんもほとんど寝ている。

ぼくももつと、人間と猫、どちらにもいい手本がいるので、参考にして、もっと休憩を取ろうと思つ。

## 自分が悪いのか、他者が悪いのか

今日もダーヨの元に占いに来た人は、**深刻な顔**をしていた。

すでに先ほど相談は終わり帰つていったのだが、精神的にしんどい様子であつた。

今回はチヨンサもその面談に立ち会つたのだが、その相談者は、ある事柄について、自分が悪いのか、それとも他人が悪いのか、その境界線のことで悩んでいるということであつた。

ある事柄とは、主に仕事のことのようだが、その相談者がやつてている仕事の範囲を超えたところで、相手方から文句を言われることがあるらしい。

その相談者は蜂<sup>はち</sup>を飼育<sup>しつく</sup>して、その蜂蜜<sup>はちみつ</sup>を売りに行く仕事をしていた。

それで蜂蜜を売るときに、相手から、この間より品質が落ちていると文句を言われたらしい。相談者はすぐに相手に謝つて、会社の方にこのことを報告した。

しかし会社からは、今はこの蜂蜜の品質が限界であり、昔よりは確かに質は落ちているかもしけないが、これ以上は上げられないという。

それでも相談者は会社から、その蜂蜜を今までと同じ金額で売つてくるよう指示を受けており、困り果てているということであつた。

ここで自分が悪いか、他人が悪いかという話なのだが、客観的に見れば、相談者に落ち度は全くない。どちらかというと、会社とお客様の双方に挟まれ、かわいそだとチヨンサは思った。

しかしこともあるうに、この相談者は自分を責めてしまうのだといつ。

自分がもつとお客様に接していい印象を得ていれば、たとえ品質が悪かるうと売れるのではないかと。もつと自分を改善すれば売れるのではないかと自分を責めてしまうのだといつ。

客観的に見ればそんなところまで相談者がする必要はないと思つてしまつ。しかしこの相談者はお客様と会社、どうにかWinWin（双赢・双赢）にしようと間に挟まれ、頑張つてしまつとのことであつた。

ただ、それもかなり心労<sup>しんろう</sup>が重なるといふで、お客様からは品質を上げる、会社からは今までと同じ価格で売つてこいと<sup>て</sup>いわれ、へトへトになつてしまい、占い<sup>て</sup>いと<sup>て</sup>いう体で、ダーヨに相談しに来たといつわけであつた。

## 力を抜いて、続けてみる

ダーヨはまず客観的に見て、相談者に少しも悪いところはない、釘<sup>くぎ</sup>を刺した。  
その上で一つアドバイスをした。

「あなたには一つも悪いところはありません。両者の間をなんとか保とうと頑張つていらつしやる。その行為は素晴らしいものです。本来は会社のせいにしたいところをなんとか頑張つて踏みとどまつていて。その行為は素晴らしいです。

しかしこのままだと両者に挟まれ、あなたがつらいでしょう。ここで一つアドバイスがあります」  
ダーヨは一呼吸置いてから、話を続けた。

「いわゆる、自分で変えられる部分を内部環境、どう足搔<sup>あが</sup>いても変えられない部分を外部環境と呼ぶことにしましょう。

あなたがどう頑張つても、いきなり会社<sup>かいしゃ</sup>が蜂蜜の品質を上げることは難しいでしょう。これを外部環境と呼びます。

一方、そういう状況であつたとしても、あなたはその品質の低下の理由を説明したり、なにか他のプロモーション方法を使って製品を売つたり計画することはできるでしょう。これを内部環境と呼びます」

自分でどうにかできる範囲が内部環境、どうにもできない部分を外部環境と呼ぶらしい。チヨンサはあからさまにメモは取れないので、頭の中で復唱した。

「あなたはどうやら内部環境を使って、どうにかその環境を変えようとしていますが、何事も限界があります。自分がどう足搔<sup>あが</sup>いても無理そうであつたら、あきらめて、もう流れに身を任す。そのくらいの脱力<sup>だつりょく</sup>をした方がいいでしょう」

「脱力ですか、、、なるほど」

確かにその相談者は、自分がどうにかしなければいけないと、肩に力が入つていてる感じだつた。脱力というキーワードを聞いて、相談者はふうと息を吐き、脱力を試みている様子であつた。

「しかししばらくするとあなたは思うでしょう。脱力して多少リラックスしたところで、問題は解決しない、どうすれば良いのか、と」

その通りで、頑張つてもどうにもならない、じゃあやめたと物事をあきらめられればどんなに楽か。そういうつらいことがあつても、我々は食つていかなければならぬ。物事を放置したままでは済まされないのである。

「あきらめて身を任せても問題が全然解決しないとき、どうすればいいのか。実はさつきと囁いていることが矛盾しているかのようですが、あきらめずに続ける、ということなのです」

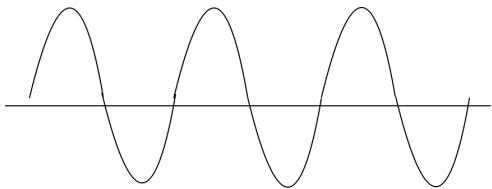
チヨンサの頭には？？？と？が三つくらいついた。

結局あきらめない？さつきは潔くあきらめて身を任せようと囁いていたが、どういうことなのか。

「つまり、どうにもならない環境においては、頑張ってみたり、ときにはあきらめて力を抜いたり、それで少し休憩が取れたらまた頑張つたりと、波のように行うことことが重要なのです」

そういうと、ダーヨは部屋にあつた黒板に波の図を描いた。

頑張る  
手を抜く  
でも続ける



「まるで息をしているみたいだな」

驚いて部屋を見渡すと、なんと猫のムネマが一つの間にかいて、相談者の横にちょこんと座り、ダーヨが描いた波の図を見ていた。

「息を吸つたり吐いたり、猫も人間も、吸つてばかりじゃだめ、吐いてばかりでもだめ。やっぱり吸つて吐いてと逆のことをしねえと生きられねえ。」

頑張るだけでもだめだし、急げているだけでもだめ。結局どっちも同じくらい必要だつてことなんだろうな」

確かに、頑張りと脱力。どちらかだけでもだめで、両方必要な要因だ。

それにチヨンサが思ったのは、呼吸も吸つて吐いてと逆の行動をするが、ポイントはそれを“続けていることだ。吸つて吐いて、また吸つて吐いて。これの繰り返し、つまりやめないことが呼吸の重要な鍵である気がした。

## チヨンサの日記

○月○日 晴れ

今日の相談者さんの話も参考になつた。ぼくにも時々、これは自分が悪いのか、それとも他人が悪いのかと線引きを引きたくなる。

自分が悪くない時は相手に改善かいぜんしてもらいたいと思う。でもそう明確に線を引けるところは少なくて、自分の頑張りでこれは改善できるんじゃないかと、自分の頑張りでカバーしようとする時がある。

でも別にそれは悪いことではなくて、逆にいいことだと思つ。

問題なのは頑張りすぎることで、それに結果が出ない時に自分を責めてしまつたのもよくない」とだと思つ。

そもそも自分の責任（ダークさんは内部環境と呼んでいた）として、その物事の改善にあたることは素晴らしい行為だと思つ。ほぼ全ての人は外部環境（自分ではどうしようもできない状況）<sup>しおうせん</sup>だとして、改善をあきらめてしまう。しかし勇敢にもその改善にあたる<sup>あたる</sup>としていることは、賞賛に値すると思つ。

ムネマさんも言つていたが、頑張りと息抜き、両方必要なんだと思う。それに続けること。その続けることについては、まず自分を責めない、攻撃しないという点が、ひどく重要だと思った。

## 第6章 脱力のしかた

### チヨンサ、ダウン

今日、せっかくまた、相談をしている場面に同席して良いということだったのに、チヨンサはなんか上の空であった。

最近は頑張る場面とあえて力を抜く場面と、両方作るようにしていたのだが、それでもなんだか疲れが取れていらないような気がしていて、頭がぼーとしてしまうのだ。

何かをやつしていくも、どこか目はうつろで、人の話を聞いているのか聞いていないのか、よくわからない様子であった。

相談者はもう来歩いて、何やら必死にダーツに相談をしている。

しかしそれも今のチヨンサにとつては、すごい他人事で、正直どうでもいい風に映つてしまつていた。

ふと窓を見ると、窓辺で猫のムネマがこれまた気持ちよさそうにくつろいでいる。

陽の光が気持ちいいのか、両目をとじ、丸くなつてすやすやと寝ている。  
と思うと、目をパチリと開け、あくびをしながら伸びをした。

そうしてまた目を閉じて寝てしまつたのである。

これこそ、脱力というか、リラックスの境地というもののような気がした。

チヨンサは自分を振り返つてみて、どうやら脱力すること自体を頑張つてしまつていたらしくことに気付いた。

休むことが苦手なチヨンサは、ちゃんと「休むぞ」と意識しないと休むことができない。それを意識してしまっているからこそ、精神的にもリラックスができない状態が続いてしまっていたのである。

その日の相談も無事終わり、明日は休日であった。チヨンサは足早にダーヨの事務所を退社し、家路に着くのであった。

### 体が動かない

休日のその日は、朝もなんだか心が晴れず寝過ごしてしまった。

子どもたちは元気に遊んでいるが、昨日に引き続き、チヨンサはなんだかぼーとしてしまっていた。その状態は夕方近くまで続いた。いつもはテキパキと家事をこなすチヨンサだが、体が重く動かないため、妻が家事をこなしてくれていた。

申し訳ないと思いつつも、どうしても体が動かないので、ベッドで横になっていた。

体力はとうに回復しているはずなのに、体がぴくりとも動かなかつた。

このまま動けなくなってしまったらどうしよう。そう思った時であった。

ふと自宅の窓辺を見ると、また猫のムネマがいた。全くプライベートなんてあってないようなものである。

「よお、チヨンサ。また元気がなさそうだな。また頑張りすぎたか」  
ニヤニヤと笑っているように見える。チヨンサは少しムツとした。

「そんなおかしいことじやないですよ。なんだか頑張りとリラックスを両方取るようだ、それこそ頑張つてしまつたみたいで、少しダウンしているだけです。もう少しで回復します」

ムネマは手で毛繕いをしながらチヨンサに言つた。

「ふん、まあ動ける時は急に動けるようになるからな。六時になつたら動き出せるとか、そういうもんじやねえんだ。とりあえず回復して、その時を待つ。まあ回復する手立てはそれしかないな」

そう言つて、ぴょんと窓から外へ出て行つてしまつた。

## 外界に心を開く

もう日が傾き始めていた。まだ体は動かない。チヨンサは田を閉じた。そうすると、外から小鳥の鳴く声がした。

ピーチクパーチク。なんだかおしゃべりをしているようだ。

その時なぜだかわからないが、チヨンサは小鳥たちに応援されているような気になつた。

チヨンサ、頑張れよ、応援してるぞ。ピーチクパーチク。

チヨンサは昔から鳥が好きだった。自由にどこまでも飛んでいける鳥。チヨンサは空を眺めながら、そんな鳥を見るのが好きだったのである。

その鳥からなんだか応援されているような気がした。

そう思うと、なぜかチヨンサは体が動くようになつていて、気付いた。

なんだつたのだろう、ポイントは。それは時に応じて違うのかもしれない。

誰から声をかけてもらえたことや、何か自分の好きなことに触れたときなのかもしれない。

いつ復活するかわからないのは、非常に不安である。しかしいつか必ず復活できる。それまではとりあえず安静にして、精神的、体力的にも体を回復させることが重要である。あとは周りとうまく調和して、復活の兆しを掴むのが良い気がした。

## 日記：回復のしかたは、まだまだ難しい

○月○日　雨

ここ最近また頑張りすぎてしまつたためか、体がダウントしてしまつた。

ダウントといつても熱を出したりしたわけではない。なぜか体が動かなくなつてしまつたのだ。

ただ、比較的早く、一日くらいで復活できた。忘れないようにコツをここに書いておこうと思う。まず徹底的に休んで体力を回復させることだ。物理的に体が疲れてしまつてしているので、よく寝てよく食べる。太陽の光を浴びる。適度な運動をするなど、いわゆる健康的と呼ばれることはやつた方が良いように思う。

あと復活できるかはタイミング次第なことがある。今回ぼくはひょんなことから復活できたが、日によつて違うと思う。ただこういう時は自分の中にふさぎ込みがちなので、周りに心を開くというか調和するような気持ちで心を開いてみると、いいふうな気がする。

次、会社行つた際、ダーヨさんから「なんだか吹つ切れた様子で、顔が晴れやかですね。よかつたですね」と言われた。やはり顔にも出ていたらしい。脱力とリラックス。なんと奥深いことか。ダウントしないように、回復のしかたをしつかりと学びたいと思う。

# 他人を優先してしまった症候群

今日の相談者さんは、人のことを優先しすぎて、自分のことを大事にできず、困っているという相談であつた。

今日のこちら側の布陣は、ダーヨ、チヨンサ、ムネマと勢揃いであつた。ダーヨとチヨンサ、それに相談者はソファに腰掛け、ムネマは窓辺で寝そべるというスタイルであつた。

だがその我慢は着実にストレスになつていて、早く自分一人になりたい、他人とは距離を置きたいと人を遠ざける傾向があつた。

それに一人になると今までの我慢を解消するかのように、自分の好きなことをしてしまい、暴飲暴食に走る。それにより健康被害を被るようになつており、どうにかこの悪循環を断ち切りたいということであった。

人間からしたら、ニヤーと言つてゐるようしか聞こえないが、猫語がわかるチヨンサには、ムネマ  
がそのように言つてゐるのがはつきりと聞こえた。

そんな簡単に性格が変えられたら苦労しないんですよ。 そうチヨンサは心の中で言つた。

ひとしきり相談者からの告白が終わると、ダーヨが口元に手をやりながら話した。

「まあ、あなたのお気持ちはわかりますよ。 でもどうしたものですかね。 こういう時は水晶に占つてもらいますか」

一応、ダーヨは占い師ということで商売をしているので、水晶のよつなザ・占い師というアイテムも持ち合わせている。 しかし占いは形だけで、ダーヨの中では答えは決まつていていた。 一応形だけはやつておくということで、時々こうして水晶で占つてみたりしている。

紫色の水晶を持ってきてテーブルの上に乗せると、ダーヨは目を閉じ、じによじよと話し始めた。 しばらくして目を開くと、占いの結果を相談者に伝えた。

## 性格は変えられない

「どうですね、ズバリ出ました」

「私はどうすればこの苦しみから解放されるのでしょうか」

相談者がそう聞くと、ダーヨは予想外の回答をした。

「はい、ズバリ、これは性格の問題なので、どうしようもありません  
「そ、そんな・・・」

元も子もない回答で、相談者の顔に絶望の色が浮かんだ。 奥の窓辺ではムネマがにやにやしているよう見えた。

「つたく、甘えたことを言つていないで、嫌なものは嫌。そうじゃなかつたら我慢するんだな。それに我慢できるくらいのことつてことさ。本当に嫌なことだつたらちゃんと断つているつて」

ムネマの「メントは辛辣しあんひであつた。それに対し、ダーヨからの答えは幾分優しいものであつた。

「占いはどうしようもないということでしたが、少し私から補足すると、多分あなたは前に嫌なことを断つて嫌な思いをした。そんな嫌な思いをするくらいであつたら、最初の嫌なことは受け取つてしまつた方がいいという決断をしたのだと思ひます。

確かにそれは良い判断なのですが、ずっと反抗おのこなしないままだと心が沈んでいつてしまいます。何か紙に自分の気持ちを書くなどして、自分の気持ちを可視化かしかしたほうが良いでしょうね

相談者は真剣な眼差しでダーヨを見つめている。

「それはすでにおこな行つたのですが、ペンを取るのが億劫おつくうでなかなか続けられないのです。もしかすると自分で、どうせ書いたところでこの問題は解決しないと思つてしまつてゐるのかもしれません」

「じゃあ独り言を言つてみるのはいかがでしょう」

咄嗟とつさにチヨンサは自分の考えを言葉に出した。

「それもやつてみました。しかしながら気持ちは沈んでいる時に、独り言を言つたり、文字を書いていたりするのは億劫なんですね」

どうやらこの相談者はあらゆることをしたが、それでも改善せず困つてゐる様子であつた。

「解決しないことだよ」

ムネマはぼそつと言つた。誰に言つうのでもなく、遠い目をしてそう言つた。

「そんなに性格が変えられねえつて駄々だだをこねるんだつたら、もう変えるのは諦めるんだな。どうせさつきも言つたみたいに、本当にまずい時は断るだろうよ。

それよりもそんなにどうしようもねえと思つてゐるのに時間をかけるより、もっと自分の好きなことをすればいいと思うけどな」

ムネマはそうぼやき、ぴょんと窓辺から出て行つてしまつた。

## 動かない石より、動く石を

確かに性格を変えるのは難しい。であればそこに労力をかけるより、自分の好きなことに時間をかけた方が有意義ではないのだろうか。

チヨンサはムネマの言葉を代弁するかのように、相談者に話した。

「性格を変えるのって難しいですよね。だったらそこに時間をかけるのではなくて、ご自分の好きなことに時間をかけるのはいかがでしょうか」

チヨンサの言葉に、相談者のみならず、ダーヨも驚いた様子であつた。

「私の好きなこと・・・あります。確かにあーだこーだと悩むより、その時間を自分の好きなことに使つた方がいいかもしません」

相談者はいくらか合点がいったような様子であつた。

「チヨンサさんの今のアドバイスはいいですね。先ほどの水晶の占いの結果のように、性格はなかなか変えられるものではないのですよ。でしたらそれをどうこうするより、ご自分の好きなことに時間を割いた方がいいかもしませんね。動かない石を頑張つて押すより、動く石を動かした方が有意義かもしません」

ダーヨからの言葉に相談者は口クリとうなづき、納得した様子で、ダーヨの事務所を後にしたのであつた。

相談者を見送った後で、ダーヨはチヨンサに尋ねた。

「チヨンサさんが相談の内容に直接アドバイスをするのは、今日が初めてでしたね」  
チヨンサはどきりとした。相談者はダーヨに対して相談をしにきているのに、自分がしゃしゃり出て、偉そうにコメントをしてしまつた。怒られるかと思った。しかしだーヨの反応は違つていた。  
「あちらのアドバイス、芯しんをついていて良かつたと思います。私はどうしても問題を解決しようとしたのですが、ちやくがんそうではなくてそこは置いておいて、違う自分のメリットが出せる方に注力する。よくそのポイントに着眼ちやくがんできたものです」

ダーヨはアドバイスが良かつたと褒めてくれた。しかしチヨンサは言えなかつた。それは自分のものではなく、友達の猫の言葉であつた。

そんなことは言えないので、少し申し訳なさそうに、チヨンサはうなづくのであつた。

## チヨンサの日記「どうに力を入れるか」

○月○日 くもり

今日は初めてダーヨさんと相談者さんとの会話に、口を挟んでしまつた。  
猫のムネマさんが言つていた言葉が、いいアドバイスだと思って、それをみんなにシェアしないのはもつたらないと思つたのだ。結果、ムネマさんの言葉は相談者さんにも響いたみたいだし、良かつた。

性格はなかなか変えづらいものだと思う。もちろん矯正<sup>きょうせい</sup>し続けねば直るのかもしれないけど、相当骨が折れるのは確実だろう。それよりも自分の好きなことに注力したほうが、幸せな人生を送れるのかかもしれない。

## 第8章 良さの伝え方

### 良さが伝わらない

今日の相談者も、眉間に皺を寄せ、明らかに困っている風の男性であつた。ダー・ヨとチヨンサはソファに並んで腰掛け、相談者からの話を聞いた。

その男性は万病に効くという不思議な飲み薬を売っているが、なかなか売れず困っているという。試しに飲んでみてほしいという願いから、恐る恐るチヨンサは飲んでみた。こういうとき、ダー・ヨは素知らぬ顔をして、そういう危険なものは摂取しない。しかしチヨンサは少しだけ好奇心が勝ち、その飲み薬を飲んでみた。

意外に甘い味で、少し変な感じもした。しかし不味くはない。飲んでみたが、特別元気が出でくるというわけではなかつた。

しかしそこからしゃべつて数分経つた頃、いやに自分のテンションが上がつてきていることに気づいた。いつもであればこういった相談の場でしゃしゃり出てコメントするのは差し控えるのだが、なぜだか言葉が後から後から出てきてしまつた。

これがこの飲み薬の効果であつた。万病に効くというよりも、テンションが上がる、一種の興奮剤のようであつた。

別にこれが良いか悪いかは置いておき、なぜこれが売れないのかがさっぱりわからないというのが相談者の悩みであつた。

「これを飲むと元気が出るんです。いろんな人の役に立つと思って売り歩いているんですが、なかなか売れなくて・・・。どうすれば売れるようになるんでしょうか」

まゆをへの字に曲げた相談者であった。ダーヨは薄気味悪そうに、チヨンサが飲み切った飲み薬を見てから言った。

「口に入れるものというのは誰しも抵抗感があります。その抵抗感をなくすために広告を打つたり、みんながすでに飲んでいるという風に見せかけて、飲むのは安全だと思い込ませているのです。

あなたが個人的にやつても、いきなり見ず知らずの人が来て、これは万病に効く薬です、と言われても気味悪がつて飲まないでしよう」「

悔しそうに相談者はダーヨに食らいついた。

「でも、でもこれは本当にいいものなのです。確かに飲み終わって少しすると脱力感は出ますが、一気に力が出るという点においては非常に価値のあるものです。これを欲しがっている人は必ずいます。私はそういう人にこれを届けたいのです」

「まじめだねえ、この人間も」

ふと見ると、いつもの窓辺の定位位置に猫のムネマが少し笑いながら体を横たえている。いや、正確に笑っているのかは猫だからよくわからないのだが、チヨンサには薄ら笑っているように見えた。

「この人間は信じ切っちゃつているわけだ、これが役に立つってな。恋は盲目もうもくつてのは人間のことわざだったな。それと同じだよな。あまりに没頭ぼうとうしそぎてしまうと周りが見えなくなつちまう。それのいい例だろ」

そこまで言つとムネマはあくびをした。鋭いが小さな歯たちがよく見えた。

きっと他の人たちにはニヤーニヤーと猫が鳴いている風にしか聞こえていないのだろう。そのニヤーニヤーという声が止んだからか、ダーヨが再び口を開いた。

「あなたの熱意はわかります。いいものを共有したいというのは、集団生活を営む人間にとつて、とても基本的なことです。あなたは間違つていません。

でも伝え方というのがありますね。さつきも言ったように飲食物を売るのであれば、安全・安心がまず担保されていない人は買いません。そこを少し考えた方がいいでしょうね」

がつくりと相談者は肩を落としてしまつた。何か有益なアドバイスがもらえるかと思つて期待していたのに、それほど大した話が聞けなかつたからであろう。なにか空回りしているこの相談者が、チヨンサはかわいそうになつてきた。

元より、このダーヨの占い（という名の相談）に来る人は眞面目でいい人ばかりである。眞面目で頑張りすぎるが故に、固くなつてなかなか人に受け入れてもらえていない。頑張っているのに成果がないからモチベーションが低くなつたり、できない自分を責めていたりする。完全な悪循環に陥つていた。

## 相手は何もわかつていらない子どもである

相談者から半ば強制的に飲まされた飲み薬のせいで、テンションがいつもより高くなつっていたチヨンサは、こう言つた。

「ぼくも自分にとつてはいいと思うのにそれがなかなか相手に理解されなくて、すぐ悲しくなつたり、逆にこの素晴らしさがわからないなんて、なんて相手は愚かなんだと思つてしまふことがあります

す。

でも思うのが自分は教師だと思うことにしているんです

「教師？」

相談者は明らかに顔にクエスショングが浮かんでいた。しかしダー三とムネマはハツとした顔をしていた。

「はい、教師です。つまり自分はわかっているが、相手はわかっていない子ども。相手にわかつてもううためにはどうすればいいかを考えるんです。相手が子どもだと思って、どうすればわかつてもうえるかを考えるんです」

今度ははつきりと笑っているのが見えたムネマが言った。

「おお、それはナイスアイデイアだよ、チヨンサ。そう、相手は何もわかつてねえガキンチョだ。それに教えてあげるくらいの気概がないとな」

ダー三も、

「いいアイデイアですね、チヨンサさん。相手が子どもだと思えば、これはいい薬だよ、と怪しいおじさんから言い寄られても絶対飲みませんものね」

怪しいおじさんと言われて普通はカチンと来そうなものなのに、アイデイアの素晴らしさにそれを忘れ、相談者も興奮気味に言った。

「そうですね！言われてみればそれはそうだ。まず薬だなんて言われて子どもが飲むはずもない。

私はどうやら相手を自分の言うことをちゃんと理解してくれる立派な大人だと、高く見積もりしきっていたかもしけない」

そう言ってウンウンと相談者はうなづいた。チヨンサは話を続けた。

「まず相手を何もわからない子どもだと思って、理解できる説明を心がける。でもわかつてもらえない  
くてもいいのかもしません。自分の発することがまだ相手に理解できるくらい具体になつていな  
い。そういう時は総スカンを食らうことになるでしょう。」

でもその時も、そりやあよくわからないことをしているんだから、無視されるのは当たり前という  
くらいの気概を持つた方がいいのかもしれません。それにそれを続けていればよくわからないが何か  
続けている人と、興味を持つてくれるかもしれません」

チヨンサの言葉に他の三人（うち猫一匹）は納得した様子でその日の相談は終わったのであつた。

### チヨンサの日記…わかつてくれずとも良い

○月○日 晴れ

今日も相談の場でたくさん話してしまった・・・。あの飲み薬のせいだ。あれのせいいでテンションが  
変な感じになってしまった。あの場は頭が回転してよかつたけど、夜になると気分が悪くなつたか  
ら、もう飲むのはよそう。

でも子どもに教えてあげるくらいわかりやすくというアイディアはよかつたな。それに別にわかつて  
もらえなくとも気にしないという見方もよかつたと思う。わかつてもらえなくとも続けていれば何か  
しら興味は持つてくれる。大丈夫、そのまま進んでいいということがなんとなくわかつた気がする。

### パパとしてのムネマ

チヨンサと猫のムネマは公園でひなたぼっこをしていた。チヨンサの方はこれからダーヨと一緒に相談者の相談に乗るのだが、その前に少し休憩を取っていた。

ムネマはいつも暇そうにしているので、別に今日は特別変わった日ではない。しかしムネマの顔は曇りがちであつた。

「どうしたんですか、ムネマさん。今日は元気がなさそうじゃないですか」

いつもはすぐに憎まれ口を叩くムネマなのに、元気がない様子が不安で、チヨンサは声をかけた。ムネマは少し遠い目をしながら言つた。

「いや、俺の子どもがな・・・。全然言つことを聞かなくてな」

猫の世界では、人間世界とは違つて、結婚して子どもができるも、あまり父親が育児に<sup>かんよ</sup>関与するということはないらしい。

基本的に奥さん側が子どもの面倒を見るという感じで、父親は子育てをしない。そういうのが猫社会の一般的な家庭像らしい。

ふらつとどこかに遊びに行つて、好きなことをして家に帰つてくる。そんな何もしない父親なのに猫社会ではそれでいいらしい。楽な父親だなど、その話を聞いたとき、チヨンサは思った。ムネマには三人の子どもがいる。まだ成猫になつておらず、小さい子猫たちだ。

「」の前夕しぶりに家に帰つたらよ、子どもたちがなんとなく俺の『』とを聞かなくなつてゐるんだよ。あんまり家に帰らないからかな。父親の威厳<sup>いげん</sup>が失くなつてきてゐるのかもしだねえ」

「どうやらムネマは父親の威厳が失われてゐることに、危機感を覚えているらしかつた。

「ムネマさん、猫の世界はどうだか知らないですけど、もっと家に帰つた方がいいですつて。そんな感じで独身時代と同じスタイルじゃなくて、もっと家庭にいないと」

そういうチヨンサを邪魔<sup>じやくま</sup>に扱い、

「うるせえなあ。俺はお前みたいに奥さん<sup>オカニ</sup>にペコペコして、ヒイヒイ言いながら仕事をする人間の生き方は、まっぴらごめんだね」

そう『』とムネマは去つていつた。

## 邪魔にされるムネマ

ムネマが家に帰ると、奥さん猫と、子猫三四<sup>三四</sup>はちょうど家にいた。三四<sup>三四</sup>でどこから取つてきたのか、魚を食べている。ムネマはまだご飯を食べていなかつたことに気づいた。

「おつ、サンマか。いいじゃねえか。俺にも少し分けてくれよ」

そんなムネマを差し置いて、無視するかのように、奥さん猫も子ども猫たちもムネマには話しかけなかつた。いい加減ムネマも腹が立つてきた。

「なんだよ、いつたいなんなんだよ。無視しやがつて。俺は父親だぞ。そんな舐めた真似してタダで済むと思つてんのか！」

ムネマはかなり語氣が強い口調で怒鳴ったが、四匹とも黙つたままでだつた。ボソリと奥さん猫が言つた。

「あなたは自分が今まで何をしてきたのかわかつてゐるの？家にも帰らずフラフラして、たまに帰つてきたと思つたら偉そうにして。それで慕つてもらえると思つてゐるの？子どもたちの気持ちも考えてよ」

奥さん猫からそう言われ、バツが悪くなつたムネマは今度は家から飛び出していつたのであつた。

### 育児に悩む人間

ムネマはトボトボと歩き、結局ダーヨの事務所に戻つてしまつた。ダーヨとチヨンサがもう一人の人間と話をしている。また困つたやつが来たなど、ムネマは辟易とした。耳を傾けてみると、子育てにうまくいっていないという母親であつた。母親は涙ながらにこう話した。

「うちの主人はろくに仕事もしないで遊び呆けて、たまに帰つてたら飯はあるのかつて、本当に頼りがなくてるくなしなんです。なんであんな男と結婚したのか。私の人生の本当に汚点です」ムネマはどきりとした。猫の自分のことであるはずがないのに、さも自分が非難されているかのような気がしたのだ。人間の相談者は話を続けた。

「実は、子どもが学校になじめていないみたいなんです。なんだかお友達と合わないらしくつて。本当は主人にも相談に乗つてあげてほしいんですけど、この調子でしょ・・・。頼りにならなくつて」ずっと話を聞き続けていたダーヨが初めて口を開けた。

「お子さんはご主人のことをなんと言つてゐるんでしょうか」

「本当は子どもたちはパパのことが大好きなんです。でもずっと家にいないから拗ねてしまつて。私のように冷たく対応してしまつています」

ムネマは複雑な気持ちであつた。自分の子どもたちは自分のことをどう思つてゐるんだろう。さつきもサンマを全然分けてくれなかつた。とつこの昔に嫌われてしまつたのだろうか。でも嫌われても当然か。飯をろくに家に持ち帰らず、フランフランしてゐるだけの父親だ。そんな父親を好きになつてもらえる方が不思議だ。

ボーとしているムネマであつたが、そんな状況を一変させることが起きた。なんとムネマの奥さん猫がダーヨの事務所にものすごい速さでやつてきたのである。

ゼエゼエ言う奥さん猫に向かつて、

「なんだ、なんだそんなに慌てて。さつきのことは俺は謝らねえぞ」

奥さん猫は首を振つて、ムネマの主張を否定した。

「そんなんじゃないの！さつき下の子が友達と喧嘩して怪我を負つて。病院に行つたの！」

病院？怪我？大丈夫だらうか・・・。下の子猫の顔が瞬時にムネマの頭に浮かび上がつた。

次の瞬間に、ムネマは飛び出していた。

## 暴力は振るうな

下の子猫が治療ちりょうされていたのは、レストランの裏手にある「ゴミ捨て場であつた。よく野良猫たちはここでたむろする。そしてその一角には「病院」と呼ばれ、怪我をした野良猫が運ばれる場所があつた。下の子猫は誰かに手当され、横になつていた。

「おい、大丈夫か」

「あ、お父さん」

気づくと下の子猫は身を起こうとした。

「別に起きなくていい。そこでゆっくりしどけ。でも一体全体何があつたんだ」

そう言いながら周りを見渡すと、あと五、六匹の猫がどこかに怪我をして横たわっていた。下の子猫から聞くに、ところどころ辻襷つじまきが合っていなくてよくわからなかつたが、どうやら相当馬鹿にされてこちらから手を出してしまつたらしい。

「お前の言つことはわかるが、手を出すのはまずかつたぞ。手を出した方が悪くなつちまつ」  
そう言つていると、後ろから声をかけられた。

「お宅か、うちの次男坊を爪で引っ搔いたやつは」

振り返ると、下の子猫と一緒にくらいの猫と、親猫がこちらを見ていた。どうやらムネマの子どもが手を出してしまつた猫と、その親らしい。一緒に怪我の手当をされていたのだ。

ムネマはまずはしっかりと謝つた。

「この度は申し訳ねえ。手を出しちまつたのは申し分の立たねえことだ。すまなかつた」  
ちゃんとムネマは謝つたが、向こうはそれで図に乗つたのか。色々と文句を言い始めてきた。

お宅の子はすぐに暴力を振るうだとか。

何を言つても、言つことを聞かず、周りに迷惑をかけているとか。

散々文句を言われ、ムネマは腹が立ってきた。

「おい。好き放題言わせておけば図に乗りやがつて。こつちが手を出してきたのも悪いが、そつちも仕返ししてんだから、お互い様だらうが。それをなんだ、ぐちぐちと」

危うく喧嘩になりそうだったが、遅れて到着したムネマの奥さん猫になだめられ、その場は親同士の喧嘩に発展することなく、解散となつた。

ムネマ、奥さん猫、下の子猫はとぼとぼと家路に着くために歩いていた。その時、下の子猫がボソリと言つた。

「お父さん、お母さん、ごめん、僕のせいで、迷惑をかけて」  
ムネマは胸が痛くなつた。そして言つた。

「いいんだ。別にお前が100%悪いってわけじゃねえ。お前にはお前の言い分があるんだろ? だったら別にそんなに反省することはないさ。ただ、暴力を振るうことはもうしないでくれよな」「コクリと下の子猫はうなづいた。

## 親のできること

ムネマが子猫を連れて家に帰つていた頃、ダー円の事務所ではもうそろそろ相談の時間が終わりそうになつていた。

実はこの相談者の母親も学校でトラブルがあり、子どもが喧嘩をしてしまつたらしい。どう対処しようかとの悩みも相談されていた。

ダー円のアドバイスはこうであった。

「子どもは子ども同士、いろいろと同じ場所で生活していたらトラブルもあるでしょう。しかし大事なことは、親は子どもの味方でいるということだと思います。やはり子どもが頼りにできるのはまずは親です。その親が自分の子どもを信じないでどうするものかと思うのです。

何があつても自分の子どもを信じること、愛することが、親のできることなのではないでしょうか

## チヨンサの日記・子どもには幸せになつてほしい

○月○日 晴れ

今日の相談者さんはママさんで、子どもの育児に関する相談だった。ぼくにも子どもがいるが、いろいろと考えながら日々送つている。でもやっぱりダーヨさんも言つていたが、親ができることなんて、やっぱり子どもを愛することだつたり、一番大事に思うことなんじやないかと思う。それが今の自分に十分できているかわからないけど、子どもたちといふと幸せだし、それでいいんじゃないかと思つてゐる。自分は幸せ者だし、子どもたちにも幸せになつてほしいと思つ。

# 第10章 失敗とはなにか

## 卒業

今日の相談者はチヨンサであった。というより先日急にダーヨからこんな話があった。「チヨンサさん、あなたの行動や考え方は既に私同等か、それ以上です。これ以上私の元にいても学べることは少ないでしょう。それよりも独立して一人でやつていった方がはるかに勉強になるはずです」

それはダーヨの元を離れ独り立ちせよという卒業宣言であった。

最後に自分もダーヨに相談をしたいということで、時間を取つてもらつたのだ。

ダーヨは言った。

「私から一つあなたに伝えたいことは、失敗を恐れることです」

「失敗を恐れないこと・・・ですか」

「そうです。私があなたを見ていて気になることは、正解を求めすぎてやしないか、ということでした。

チヨンサさんは非常に眞面目な性格をしていらっしゃいます。正解やあるべき姿を求め、それを修行僧のよろに突き進む感じを受けます。

しかし人生はそんなに堅苦しくなくてよくて、失敗をしても良いのです。そこから学べることがたくさんあります」

ただ、チヨンサは、はい、わかりました、と軽い返事を返すことができなかつた。

やはり失敗はできるだけしないほうがいいと思っていたからだ。何事も成功の連続の方が理想に近づける。であれば失敗はない方がよりいいのではないか。

それをダーヨに話したところ、こんな回答が返ってきた。

「それは今まで、『失敗はしてはいけない』と、ある意味洗脳せんのうされてきているんだと思います。

学校や教育で、テストの点数が良いからあなたは良い子と、そういう条件反射を思い込まされた子どもは、テストの点数が悪い自分を受け入れられなくなります。それは点数が悪いと相手からの承認しょうにんを得ることができないと思っているからです。

学校のテストなんて、一つの価値基準かちきじゅんに過ぎません。それが悪くてもその子の人間性や価値には、なんの影響も及ぼしません」

「本当にそうかな」

気付けば事務所の相談室には猫のムネマも侵入してきていた。いつもの窓辺からこそっとやつてきたのであるう。

ムネマは続けた。

「俺は人間の世界はよくわからねえが、こっちの猫の世界はちがえぜ。そんな甘い話は通用しない。餌をちゃんと取れる野良猫が生き残るし、ぐずな猫は生きられねえ。良いとは生きれること。悪いことは生きられないことと、はつきり決まっているんだ」

そう思うと、今の人間社会は裕福で、食いつぱぐれなんてすることはない。しかし人間の本能には、これをやつたら食いつぱぐれる、つまり死ぬかも”という恐怖の心が残っていて、それが過敏に反応しているのかもしれない。

## どこまでが、生きれるのラインか

それでは、生きれることと、生きれないことの境さかいめ田はどこにあるのだろうか、チヨンサは考えた。

「ダー<sup>ヨ</sup>さん、確かにいいも悪いもそんなに気を遣いすぎなくても良いのかもしません。ただぼくは、どこまでの失敗が致命傷にならないのか、その線引きがよくわかつていません」

チヨンサは眉をひそめながら考えていた。

ダー<sup>ヨ</sup>は優しくチヨンサに声をかけた。

「あなたのその真剣に考える姿勢は素晴らしいと思<sup>おも</sup>います。それが諸刃もろはの剣となり、時に疲れてしまふこともあるでしょうが。

今の疑問、つまり生きることと生きれないことの境界線の話ですが、それは言葉では表せない」となのかもしません

「と言いますと?」

「つまり、頭で“これは危ない”と思<sup>おも</sup>っているのなら、もうそれは怖いものとして受け入れるしかない」ということです」

「でもダー<sup>ヨ</sup>さん。例えば仕事の話で例えると、ぼくは仕事をしていて、自分が使えない人間だと思われたり、ミスをしでかすことに対する恐怖を覚えます。これをやつたら集団から仲間外れにされると感じて怖いんです。

これは頭で“危ない”と感じていることです。しかしほぼはこういつ恐怖を取つ払いたいんです。もうこういつた周りの目を気にして生きていきたくないです」

ダー<sup>ヨ</sup>が答える代わりに、ムネマが答えた。

「ふん、だったら、お前が強くなるしかねえよ。強くなつて相手を見返すか、相手を自分の支配下に置いて安心するか、どちらかだな」

手厳しいムネマの意見。ダーヨが口を開いた。

「きっとチヨンサさんは今までのどこかで失敗をして仲間外れにされた経験を持っているのでしょう。それが心の傷になつて、集団からはみ出したり、正解しないことの恐れを抱いているのだと推測します。それは長い時間をかけて癒していくしかないのかも知れませんね」

それから少し話をして、最後握手をしてダーヨと別れた。

## 本能による回避

家路に帰る際、ムネマも一緒についてくれた。

「お前、これからどうするんだよ」

ムネマに問われたが、実際チヨンサは何も考えていなかつた。

「そうですねえ、どうしましよう。まさかこんなに早くダーヨさんの元を離れるとは思つていなかつたので、何も考えていません」

低くなつた太陽からの夕日を真横から受けて、眩しい中、一人と一匹は歩き続けた。

「俺は猫だから人間の考えはよくわからねえがよ。失敗してもいいんじゃねえかな」

「何を無責任な。ダメですよ、失敗なんかしちゃ。成功し続けることが大事なんです。できれば失敗

なんかしない方がいいんですよ」

頑なに失敗を嫌がるチヨンサに、いささか辟易へきえきとしながら、ムネマは話した。

「例えばよ、厳しい野良猫世界じゃ、餌にありつくことが一番。一番目は野良犬に襲われない」と、三番目の人間にいじめられないことが大事なんだ。これが野良猫の世界の三箇条かじょうなのさ。

お前の中にはこういうルールみたいなものはあるんか

ルールと言われてパツと思いつかなかつたが、考えながらチヨンサは答えた。

「うーん、そうですね。相手を傷つけないこと。優しくすること、社会を良くすること。こういったことが大事だとぼくは思っています」

「それはなんでそう思うんだ」

そう言われても難しいなとチヨンサは思つた。今まで生きてきた中で、なんとなく自分で根付いた価値観である。誰から教わつたり、今までの人生でこの価値観で生きた方が良いだらうというなんとなくの勘が働いているところもある。

「なんとなく、今まで生きてきた中でそう思つただけです」

その言葉を受けてかどうかわからないが、ムネマはチヨンサに言い放つた。

「お前は本当の死の危険に遭つたことがないから、逆にいろんなことが怖いと思つてしまつているんじゃないかな。人間世界は平和だから、平和ボケしているのかもな。別にそれはお前が悪いことじゃねえし、危険にはできるだけ遭遇しない方がいいから、それはそれでいいんじゃねえかな」

死の危険を味わつたことがない。確かに生きてきて、本当に瀕死の状態になつたことはない。それはありがたいことだ。一方、どこまでまずいことをしたら危険になるのか。それがよくわかつてないから、変な妄想で苦しんでしまうのかもしねない。

そんなとき、道の反対側から、網と大きな力ゴを持つた人が五、六人で向かつてきた。少し様子がおかしい。目がぎらついていて、戦闘体制といった感触を受ける。

「むっ、あれも野良猫じゃないか。捕まえる！」

その人たちは町の治安や風紀を守るための自衛団じえいだんであった。あとあとわかつたことだが、最近野良猫が増えて町を汚したりするから、野良猫を全部捕まえてしまおうとしているらしい。かわいそうに、捕まえられると狭い小屋に閉じ込められ、粗末な食事しか与えられず、生涯そこで閉じ込められてしまうらしい。

ムネマは動物の直感が働き、これはまずいと思ったらしかった。すぐに向かってきた人間たちに背を向け、走り出した。

そして人間が行きづらい家の屋根に。ピヨンと飛び移った。しかしムネマは昔の傷のせいで、左足がうまく動かない。急な動きに体が動かずバランスを崩し、ヒューと屋根から落ちてしまった。

しかもこともありますうに、チヨンサの頭の上に落ちてきたのだ。

ごちん！

鈍い音がした。チヨンサとムネマはぶつけた頭を抱え、痛みにしばらく悶絶した。

「いてて・・・大丈夫ですか、ムネマさん」

呼びかけたチヨンサへのムネマの回答は驚くべきものだつた。

大丈夫だよ、とか痛えじやねえかと毒付ぐのではなく、なんと  
「にゃくん」

としか言わなかつたのだ。そこからムネマはなんとか人間の言葉を喋るうとしているらしいのだが、もうチヨンサにはにやーんとしか聞こえなかつた。

猫の言葉はわからない、前の状態に戻つてしまつたのだ。

そこへ先ほどの野良猫を確保しようとしている自衛団の数名が駆けつけた。

「大丈夫ですか、頭をぶつけましたかね。全くひどい野良猫だ。こいつは捕まえていきますね」にやーん！と抗議するムネマ。自然とチヨンサはこう言つた。

「この子は野良猫ではありませんよ。ぼくの飼い猫です」

「えつ、そうだったのですか。首輪をしていなかつたので、野良猫と思つてしまつました。野良猫と思つて捕まえてしまふかもしれないでの、今度からは首輪をつけてくださいね」

そう言つて、野良猫を取り締まる自衛団の人は去つていつた。

にやーんとムネマはチヨンサに寄り添つてきた。これも何かの縁だ。ムネマを一人にはしておけない。それに野良猫の取り締まりが厳しくなるのであれば、ムネマの奥さんと三人の子どもも面倒を見なければならぬだろう。

一方、人間と喋れなくなつたムネマは、心中でこう思つていた。

「いや、危ないところだつた。野良猫の少しくらい、見逃してくれたつていいのにな。それにしても冷や汗をかいだぜ。チヨンサ、これが本当の恐怖だぜ。本当の恐怖のときは頭の前に体が動くのさ」人間一人と一匹は、ムネマの奥さんと子どもを迎えて行くため、ムネマの家に急いだ。もう日が暮れそうであつた。

## チヨンサの日記 .. ダーヨさんとの別れ、ムネマさんとの共存

○月○日 くもり

今日がダーヨさんの事務所で働く最終日だった。ダーヨさんからは多くのことを学んだ。社会のこと、人間のこと、考え方。全てが自分の血肉となつており、感謝しても仕切れない。

ダーヨさんが最後に言つてくれた言葉が忘れない。

「あなたは自分が思う以上に素晴らしい人です。あなたはものすごく謙虚なのでそれに気付いていないようですが、あなたの周りにはたくさんの人々に囲まれています。困ったときは私でもいいし、他の人に頼つてもいいのですよ」

やはりダーヨさんはいい人だったのだ。冷たかつたりそつけなかつたりするけど、実はいい人なんだ  
ということがよくわかつた。

今日から我が家にいきなり五匹の猫が増えた。ムネマさんとその家族たちだ。奥さんにはしこたま怒られたが、連れてきてしまつたのだから、仕方がない。もうムネマさんとは会話はできなくなつてしまつたが、なんとなく意思疎通はできている気がする。これからもムネマさんと一緒にいるのは、嬉しい。